

三浦市にも残る検地帳

教科書に「検地」の記述がありますが、三浦市にもそれを行った様子をしめす史料が残っています。『石渡家文書』^①により、その一部を紹介しましょう。

右の〔史料1〕^②を見て下さい。読める文字があれば読んで確認してみましょう。

一行目は「寛文十三年^{かんぶん じゅうしんねん}丑年^{うし}」、二行目は「相州^{そうしゅう}三浦領三崎二町谷村御縄水帳^{ふたまちや おんなわみずちよう}」、三行目は「午^{うま}ノ七月十七日^{しちがつしちにち}」、それに続いて「勘六打^{かんろくうち}」「郷右衛門打^{ごうえもんうち}」と書いてあります。

一行目の「寛文十三年」とは、これが書かれた年（1670 年）をしめています。「丑年」とは寛文十三年の干支が「丑」になりますから、このように書かれているわけです。

二行目の「相州三浦領三崎二町谷村御縄水帳」ですが、「相州三浦領三崎二町谷村」にある「相州」とは「相模国^{さがみのくに}」のこと、「三浦領」とは「三浦郡」のこと、「三崎二町谷村」とは

現在の白石町^{しらいし}、海外町^{かいと}付近をさしています。次の「御縄水帳^{おんなわみずちよう}」とは「検地帳」のことです。

三行目にある「午ノ七月十七日」はこの検地が行われた年月日をしめています。ただ、疑問に思うかも知れませんが、一行目の「丑」とこの「午」の干支が一致しません。それにはついては理由があります。それは後で触れましょう。

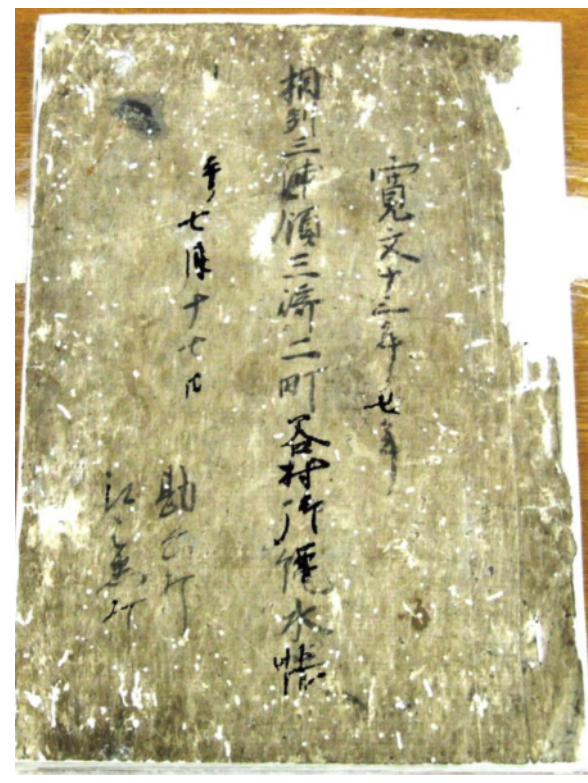
最後の「勘六打」と「郷右衛門打」ですが、まず「勘六」と「郷右衛門」は、代官（幕府の直接支配地を治めている役人）の指示を受けて実際に検地を行った者です。「打」とは「縄を打つ」ことから「田畑を測量する」という意味でしょう。

右の〔史料2〕は〔史料1〕の続きで2帖目です。これも少し難しいですが、読んでみましょう。

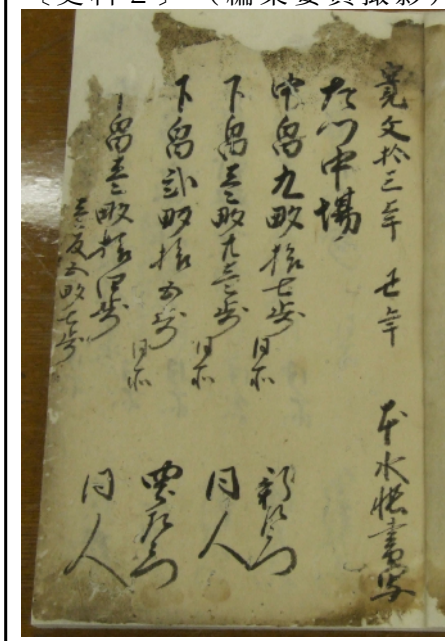
一行目は「寛文拾三年丑年 本水帳書写^{ほんみずちよう しょうわ}」、二行目は「たつ中場^{ちゅうばた}」、三行目は「中畠九畝拾七歩^{ちゅうはた せ ぶ} 同所^{どうしよ} 新左衛門^{しんざえもん}」と書いてあります。以下は省略します。

まず一行目ですが、この意味は「寛文十三（丑）年にもとの

〔史料1〕（編集委員撮影）



〔史料2〕（編集委員撮影）



水帳（検地帳）を書き写した」ということです。「もとの水帳って何だ？」という疑問が浮かぶと思います。それを解く鍵として、『^{しんぺんさがみのくにふどきこう}新編相模国風土記稿』（江戸時代にまとめられた相模国の村々の歴史、地理に関する書物）に二町谷村について「検地は文禄三年に幕府代官長谷川七左衛門^{ながつな}長綱によって行われた」という記述があり、これによりは文禄3（西暦 1594）年に検地が行われたことが分かります。そして、この文禄3年の干支がまさに「^{うま}午」となります。おそらく文禄3年に行われた検地を記録した検地帳を、何かの事情で寛文13年に書き写したのでしょう。どうでしょうか、先程の疑問が解けましたね。

文禄3年といえば豊臣秀吉が生きていた時代です。まさに歴史の重みを感じるのではないのでしょうか。

次の二行目の「たつ中場」は、^{こあざ}小字（村の中にあるもっとも小さな地名）とよばれるものですが、現在どのあたりをさすのかは分かりません。

三行目の「中畠九畝拾七歩 同所 新左衛門」は検地帳の中でもっとも大事な記述です。まず「中畠九畝拾七歩」ですが、「中畠」の「中」はその畠（＝畑）の収穫量のよしあしをしめています。この畠の場合は中くらいになります。「九畝拾七歩」は土地の広さをあらわしています。江戸時代の面積の単位は「^{ちよう}町・^{たん}反・^せ畝・^ぶ歩」で、1町＝10反＝100畝＝3000歩となります（おおよそ1町＝1ha（9917m²）となります。1歩（坪）は畳2枚の大きさを約3.3m²です。2教室分がおおよそ1畝強になります）。「同所」とは「たつ中場」のこと、最後の「新左衛門」はその土地の耕作者です。

このように 330 年前の貴重な一つの史料、検地帳から、三浦に住む当時の人びとの生活のようすが少しばかり見えてきます。先人が残してきたこのような史料を^{さんいつ}散逸させずに大切に保存し、後世にしっかり伝えることこそ私たちの大きな責務だと思います。

①石渡家は代々二町谷村の名主を務めてきた家柄である。この検地帳を含めて、約370点の史料が現在^{かながわけんりつこうぶんしょかん}神奈川県立公文書館に寄託されている。

②〔史料1〕は読みやすいように若干写真を修整した。また、〔史料1〕には「三崎二町谷村」とあるが、江戸時代に通して「三崎二町谷村」という村は存在しない。おそらくこの文禄3年の検地によって、三崎の一部を二町谷村に編入して村域を確定し、それ以後「二町谷村」を呼ばれるようになったのだろう。

＊ 29 ページ 参照。